

◆連載

いま留萌むかし 第十九話

●留萌にあった人造石油工場

「留萌人造石油工場
けふ晴の起工式」

昭和十四年六月七日付北海
タイムズ紙の見出しである。

留萌人造石油工場とは正式
には北海道人造石油留萌研究
所という。この会社は石炭か
ら人造石油を合成する使命を
もっていた。

このころ、世界は石炭を主
要エネルギーとする時代から
石油をエネルギーとする時代
へと大きく動きだしていた。

そして、我が国は国際関係の
悪化から不幸な戦争へと突入
していく前夜であった。当時、
日本の石油需要は年間三百万
トン、そのうち自給できるの
はわずか七パーセントしかな
かった。そして、日増しにア
メリカを始めとする欧米諸国
の経済封鎖がきつくなり、日
常の石油にさえ事欠く事態に
なっていた。そのため、時の
政府は液体燃料の対策に真剣
に取り組まねばならなかった。

そこでとられたのが当時まだ
余裕のあった石炭から石油を
合成するという政策である。

昭和十一年に人造石油振興七
カ年計画が立案され、翌年、
人造石油製造事業法と帝国燃
料興業株式会社法が公布され、
国策として人造石油が製造さ
れることとなった。このよう
な情勢の中で北海道人造石油
株式会社が組織されたのであ
る。

この会社は工場を滝川、留
萌、釧路に置き、石炭液化の
事業に着手した。

なぜ留萌に白羽の矢が当つ
たかというと、天塩炭田の豊
富な石炭と、昭和八年に完成
した留萌港をという製品の積
出港をもっていたことである。
そして、その港の利用に精魂
を傾けていた当時の留萌町民
の熱意であった。

昭和十四年に起工した留萌
研究所は翌十五年十月九日に
北海道人造石油株式会社留萌

研究所として開所した。翌十
六年一月から本格的な研究を
開始している。ここには多く

の一線級の化学者が配置され、
戦後の日本の化学界のリーダ
ーとなった人も多い。昭和十
九年のピークには研究所の総
員は二百八十九名にもものぼつ
た。しかし、戦況が刻一刻と
悪化していく中で物資の不足
は本格的な留萌工場の建設を
断念せざるを得なかった。主
力生産は滝川工業所で行い、
基礎的な研究および滝川工業
所で生産された粗油からより
高度な製品の開発に力が注が
れたという。

この北海道人造石油株式会
社も昭和十九年十月一日解散
し、国策により尼崎人石、三
井石油合成株式会社と合併し、
日本人造石油株式会社に再編
成された。しかし、戦況はま
すます悪化し、昭和二十年の
八月の敗戦によって、自動的
に解散となった。

わずか六年間の人石の留萌
での足跡はその後の留萌に多
くの希望を持たせるに充分で
あった。その後、昭和二十一
年九月六日、この施設は占領
軍(G. H. Q.)の勧めで留

萌水産工業株式会社として再
スタートした。

いまでも、留萌駐屯の自衛
隊の本部の建物が歴史の証人
として人石を語り続けている。



北海道人造石油株式会社留萌研究所

(現、自衛隊留萌駐屯地本部)

るもい

●特集 新しい事務体制になりました。

昭和63年7月発行・留萌市
編集・企画 振興会
印刷・白鷺印刷株式会社

1988

7